

THE MOON ART CONTEST VOL.17

月のアート展

受賞作品 ご紹介

会期：2022年9月10日～10月10日

けいはんな記念公園 ギャラリー月の庭

審査員：京都芸術大学 総合造形コース教授 柴田純生 先生

京都芸術大学 油画コース教授 奥田輝芳 先生

審査員 最優秀賞



<審査評>

大きなサイズの掛け軸の作品です。月をテーマに描かれた水墨画は黒と余白のコントラストが明確であり、迫力と強いインパクトを与えています。月と波を上下に配置し、同時に左右対称の構図は堂々としてダイナミックです。水墨画は淡い灰色の要素が多くみられるものですが、この作品では白と黒が大胆に用いられており、これまでの水墨画の概念を彷彿させているようです。ある洋画家の言葉で「黒色の世界が理解できないものは画家ではない。」を思い出します。無彩色の黒が実はものすごく多彩なのです。たかが黒といえどもされど黒なのです。墨質の違い、和紙の種類、軸の表層と表現要素も豊富です。最優秀賞の白馬さんは前回の月のアート展では日本画で出品、今回は水墨画、また写真もたくさんお持ちのようで、副賞の個展の開催では何があるか大変楽しみです。ぜひ頑張ってください。

審査員：柴田

『時は巡り潮は満ち 虚空の月となり』 白馬有利子

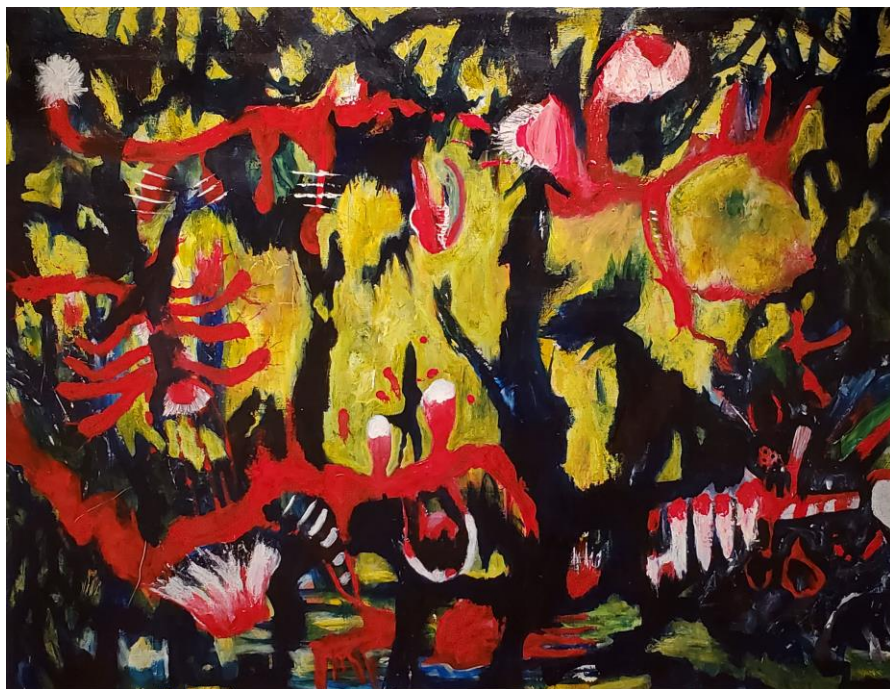
< 審査評 >



『ある光』志村翔太

映像の作品は時間の制約、見る側にとっては時間の拘束があります。普通の映像作品は、時間が作品の要素として重要になることでストーリーが生まれたり、受動的に視覚刺激を受け止めるだけの鑑賞が生まれます。しかしこの作品はストーリー性も強い刺激もありません。そこには流れる水のような抽象性を持った動きだけがあります。形がシンプルで閉じ込められた動きの中に打ち寄せる波を見ているような気持ちになります。この作品は真っ暗の部屋でぽつんと光る月を見るような展示環境が相応しいのですが、じっと見ても飽きない面白さの中に自然を感じる作品です。

審査員：奥田



『月 宴』伊藤玄悟

< 審査評 >

この作品は人間の原初的な感情を表現された作品です。人間は集団生活を営むことで子孫を残すことや生きていく上での様々な利益を得ることができるようになりました。集団生活ではそれぞれ個人にも役目がうまれ集団の結束を強めるために様々な儀礼や祭祀が行われました。そんな時代の原始社会を強い色彩と筆致で描かれたのでしょうか。人なのか動物なのか、これが何かといった説明的なものはこの絵にありません。しかし背景に大きく見える満月と「蠢く何か」が描かれています。絵の役割として人の想像力に働きかけることは一番重要なことかもしれません。この絵には止むに止まれぬ何かがあります。それがこの絵の持つ力です。

審査員：奥田



『月旅行之図』

<審査評>

蔓日々草

<制作者>

中西優多朗 中西多美子

北野瑛丈 杉本美咲

デリバヌブリブリ

竹田寛治 竹田靖人

竹田和代 森 美空

棚池清彦

絵画教室の先生とその生徒の子供たち8人による作品です。テーマの「月」を月旅行に置き換え、子供たちの夢を引き出しています。この共同作品は現代美術においてはコラボレーションと呼ばれる表現です。コラボレーションは個人のイメージの限界を超え、複数が合体することで、いわゆる予定調和でない新たなイメージを表出しようとするものです。美術の以外でも音楽。演劇、建築などさまざまな分野で取り入れられています。作品の画面では子供たちが思い描く、個性的なロケットや宇宙船が月と地球の間を自由に行き来しています。この子たちの未来では月旅行も夢では無いでしょう。宇宙空間は無重力なわけですから天地や左右がもっとひっくり返ったような構図でも良かったかもしれませんが、明るい未来を感じさせる楽しい作品です。この子供たちがこれからも美術に親しみ、月のアート展にどしどし参加してくれることを期待しています。

審査員：柴田

※ 各、敬称略